様式第２号

平成２８年度　　独 創 的 研 究 助 成 費 実 績 報 告 書

平成２９年　３月３１日

<table>
<tr><td>申　請　者</td><td>学科名</td><td colspan="2">造形デザイン</td><td>職 名</td><td>准教授</td><td>氏 名</td><td>南川　茂樹</td></tr>
<tr><td>調査研究課題</td><td colspan="7">間伐材の需要を促すため、素材を活かした空間造形デザインの研究</td></tr>
<tr><td rowspan="3">調査研究組織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td colspan="2">所属・職</td><td>専門分野</td><td colspan="2">役割分担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td>南川茂樹</td><td colspan="2">デザイン学部・准教授</td><td>造形デザイン
空間デザイン</td><td colspan="2">素材研究・構造研究
デザイン全般</td></tr>
<tr><td>分担者</td><td></td><td colspan="2"></td><td></td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>調査研究実績の概要</td><td colspan="7">間伐材の有効活用は、近年盛んになってきているが、バイオマス発電のための燃料に代表されるようその利用は至って即物的で、間伐材の特性を生かしきれているとは言い難い。本研究は、単に材質を間伐材に換えただけではなく、間伐材を有効活用することから、木材に関心持ち森林を通して環境についても考えるきっかけを生むことを目的とする。
この考えを実現するにあたり、老朽化に伴う岡山市水道局庁舎建て替えの機会を得た。その新庁舎の玄関である１階にあたる「市民コーナー」のインテリアおよび家具を含む空間デザインの提案を依頼された。新庁舎建設のコンセプトのひとつ「お客様の満足に応える開かれた庁舎」のもと、水道局としての使命である絶え間ない水の供給を物語る『水が私たちの元へ届くまでのストーリー』を表現の中心に提案を考えた。
山に降った雨が地面にしみ込み、川となって流れてきた水を浄化し、水道水として供給されている。そのストーリーをこの空間の、オブジェ、壁、ベンチで表現した。
オブジェは樹を表し、水の源である山を保護する活動のひとつ“間伐”によって生まれた間伐材を使用することで、森林保護が水の供給に繋がっていることを示唆した。ヒノキの板をワイヤーでテンションし湾曲させ、幹から伸びる枝を表現した。空間には4本の樹を配置し、森の中にいるような気分を味わってもらう狙いである。
壁は、川を表している。大きくうねる波状の壁は、水資源の豊かさを象徴し、繰り返される波形は、岡山市水道局の断水なく安定した供給の実績を示す。この壁も樹のオブジェと同じようにヒノキの間伐材でできており、無塗装のため、ヒノキの芳香も安らぐために一役買っている。</td></tr>
</table>

次頁に続く

調査研究実績の概要	ベンチは、水道水の象徴として表現した。波状の壁の一部を切り取った形状をしており、壁から取り出すことができる。壁から取り出せるベンチは、1/4円弧の形状しており、下部にキャスターがあり会場内を移動できるようになっている。これは、われわれが川の水の一部を借りて使っていることを暗喩させる。また、樹のオブジェの周りにも配され、可動の仕方によっては様々な配置が可能になり、ベンチの形状が自由に変化し、あらゆる用途にも対応できる。このベンチに座ることで、木蔭で寛いでいる気分を味わってもらう考えである。 また、壁にはモニターが埋め込まれていて、この空間ができるまでのコンセプト映像を流して、より水の大切さを感じてもらう工夫がなされている。 この空間が、市民にとっても、水道局職員にとっても、水の大切さを考えるきっかけになり、憩いの場所になることを望む。 岡山市水道局新庁舎 1F 市民コーナー 平成28年11月28日開所